

## 知的障害あるいは発達障害のある子どもの余暇活動についての検討

中澤 幸子\*

Sachiko NAKAZAWA

### I. はじめに

余暇とは、一般的には空いた時間や余っている時間を意味する言葉であるが、現代においては余暇の活動が自分自身を成長させ、能力や想像力を広げ、生活を豊かにすることが指摘されている（森山・土井，2009）。障害のある子どもにとってもそれは同様であり、将来の自立にむけて、地域参加やさまざまな環境での活動が学齢期から重要であるといわれている（中村・池本，2005）。

障害のある子どもの放課後や休日の余暇支援に関する課題は、1979（昭和54）年の養護学校義務制を機に意識され始めた。1980年代に入ると、放課後や休日の過ごし方に困難が見られる障害のある子どもの姿が問題視されるようになった。障害のある子どもの受け入れを行う学童保育（現；放課後児童クラブ）もすでに存在していたが、その数は少なく、障害のある子どもたちの多くは、放課後や休日を一人で、もしくは母親と過ごし、友だちと遊ぶ機会は少なく、テレビやビデオを観ていることが多い生活状況であった（藤本，1988）。このような背景から、障害のある子どもの放課後や休日の生活を充実させ、豊かにしていくことの必要性が議論され始めたのである（江原，1988；藤本・三島・津止，1992；津止，1988）。

国としての学童保育での障害のある子どもの受け入れの施策化は、1998（平成10）年に「放課後児童健全育成事業」によって開始された。その後、受け入れ基準の変更に伴い、2003（平成15）年には、一般の学童保育を利用している障害のある子どもは全国で推計約7,200人（全国学童保育連絡協議会，2003）となったのである。それ以降、その数は増加傾向にあり、2012（平成24）年には推計約2万2,570人と報告されている（全国学童保育連絡協議会，2013）。障害のある子どもの放課後保障についての国レベルでの初の法制化に関しては、2005（平成17）年施行の発達障害者支援法第9条において、障害児の放課後児童健全育成事業の利用を促進することが条文に含まれた。さらに、2006（平成18）年制定の障害者自立支援法により、児童デイサービス、日中一時支援事業、移動支援などの事業が行われるようになった（丸山，2009a）。

このように、放課後活動の必要性が社会的に認められるなかで、教育の分野においても、これまで教育行政が関わることのなかった余暇の過ごし方についての問題へ意識が向けられるようになってきている。中央教育審議会（2004）による「特別支援教育を推進するための制度のあり方について（中間報告）」の中で、障害のある子どもの放課後のケア等について厚生労働省等と連携しながら推進することが含まれたのである。さらに、2010（平成22）年12月に児童福祉法が改正された。それにより、2012（平成24）年4月から放課後等デイサービスの制度が新たに発足し、障害のある子どもの余暇支援の充実が図られてきている。

このように展開されてきている放課後や休日の過ごし方の保障ではあるが、これまで考えられてきた支

---

\* 静岡産業大学

援の対象は、比較的重い障害のある子どもたちが中心とされている(丸山, 2009b)。常に見守りやケアが必要な重い障害のある子どもと、単独行動ができ、ガイドヘルプも必要としないような軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもとでは、放課後や休日の過ごし方やそれに伴う保護者のニーズは異なると思われる。関連する研究として、丸山(2011)はX市の軽度知的障害のある子どもを対象に調査を行ない、学童保育や一般の文化活動やスポーツの機会の社会的な整備を行い、それらを知的障害のある子どもが参加しやすいものにする必要があることを指摘している。しかし、この調査研究は一つの市だけを対象としたものであることから、実態と課題をより広く把握することの必要性が述べられている。このように、軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもの放課後や休日の余暇支援については、まだ十分とはいえないのである。

さらに、障害のある子ども全体に話題を戻すと、余暇支援の場も依然として不足していることも報告されている(若狭つくし会, 2012)。また、市町村レベルでの行政の取り組みは地域差があり(中村・池本, 2005)、子どもや保護者の課題やニーズは地域によっても多様であると考えられる。これは、軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもも同様である。このような状況の中、筆者は、NPO法人AとB大学における筆者のゼミナールの共催として、2016(平成28年)4月より、軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもの余暇活動を企画し、運営してきた。今後、その活動を充実させるためには、参加している子どもがどのような支援を必要としているか、保護者がどのようなニーズを持って参加させているかを把握し、活動内容を企画し、実践していくことが必要であると考えられる。

本稿では、余暇支援活動に参加している軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもの休日の実態と保護者のニーズの把握から、休日の余暇活動を充実させるためにはどのような支援が必要であるか検討することを目的とする。方法として、アンケート調査を実施する。その中で、まず休日はどのように過ごしているかその実態を明らかにし、次に、余暇支援の活動内容のニーズを把握する。これらから、保護者が必要とする休日の余暇支援の内容について考察し、余暇支援の実態や課題及び改善点について検討する。

## II. 方 法

### 1. 対象児と回答者

発達に何らかの心配のある子どもの支援や相談活動を実施しているNPO法人Aに登録しており、余暇支援事業の一つとして、B大学の筆者のゼミナールに所属する学生が企画・運営している活動に参加している軽度の知的障害あるいは発達障害のある子ども(小・中学生)8人を対象とする。アンケートの回答者は、その8人の保護者とする。

### 2. 実施日

2018年2月25日(日)の10時から11時30分に実施した。

### 3. 手続き

対象児の保護者に調査用紙を手渡しで配布し、その場で回収した。調査内容は、①回答者自身について(性別、子どもとの関係)、②子どもについて(性別、学年、療育手帳の有無、学校における学習の場所、診断名)、③主に休日に行っている活動(13項目から複数回答可)、④現在の休日の過ごし方についての

評価（3項目から複数回答可）、⑤休日の過ごし方の希望（場所、グループのタイプ、人数、活動内容：いずれも複数の選択肢から複数回答可）、⑥その他（気になること、希望、要望など自由記述）であった。

#### 4. 倫理的配慮

配布する予定の調査用紙を、事前にNPO法人Aの代表者に送り、調査実施の依頼をし、許可を得た上で実施した。アンケート調査の実施に際しては、調査用紙配布前に、質問調査は無記名で実施すること、データの入力処理は調査者本人が実施し、厳重に保管すること、公表する際には数量的に処理し個人が特定されることがないこと、個人情報保護を厳守することを、文書および口頭にて伝えた。同時に、調査用紙の提出をもって調査への協力の承諾を得ること、未提出の場合でも不利益を被ることがないことも説明した。

### III. 結果と考察

#### 1. 回答者と対象児

8人の全保護者から回答が得られた。回答者は全員が母親であった。対象児の属性について、Table1に示す。対象児8人の内訳は、男6人、女2人であった。全員が地域の小・中学校に在籍しており、特別支援学級が4人、通常の学級が4人であった。また、療育手帳の所持は3人であったが、特別支援学級在籍者は4人であり、療育手帳はないが特別支援学級で学ぶ子どもがいること、発達障害の診断はされていないが、発達障害の傾向が見られつつ通常の学級で学ぶ子どもの姿が示された。

#### 2. 対象児の休日の過ごし方

普段どのように休日の時間を過ごしているかを理解しておくことは、余暇支援を充実させるにあたり、重要であると考えられる。本調査の対象児が休日をどのように過ごしているか、その結果をTable2に示す。8人の対象児中7人と、ほとんどの対象児が休日にはテレビを観て過ごしている時間のあることがわかった。これは、先行研究（細谷・大庭，2009；武藤・高畑・平野・安達，1997）と同様であり、テレビを観ることの多い休日を過ごしていることが示されたといえる。しかし、全体の活動内容と比較すると、「その他」のうち2人の活動内容は「ゲーム」や「パソコン」であり、DVDの鑑賞も3人という回答を含め、テレビと合わせると述べ12人となる。これは、延べ回答者数39人のうち、約3割がテレビ関係で時間を費やしていることとなる。

また、全回答者の半数である4人の対象児が、スポーツや学習を行っていた。「スポーツ」の具体的な内容の回答を求めたところ、「スイミング」が3人、「体操教室」が2人、「バレーボール」が1人、「なわとび」が1人であった。近隣もしくは送迎が可能な場所に、スイミングや体操を指導してもらえらる施設があり、活用していることがうかがえる。ほかにも、買い物や外食に出かけたり、福祉団体主催の活動に参加したり、なども回答されている。このように、休日は家の中でほとんどをテレビ関係で過ごしているわけではなく、家の外でも活動していることが推測される。

このような休日の過ごし方の現状について、保護者としてどのように感じているのか。その回答の結果をFig.1に、その中で、「困っている」という回答者の理由を、Table3に示す。

現状の休日の過ごし方で満足しているのは1人であった。その他の7人のうち、3人は「困っている」、

Table 1 対象者の属性

(単位：人)

性別	学年					療育手帳		主な学習の場所		診断名			
	小学3年	小学5年	小学6年	中学1年		有	無	通常級	特別支援学級	知的障害	知的障害・発達障害	発達障害	い診断はされていないが発達障害のある
男	6	3	1	2	0	2	4	3	3	0	1	3	2
女	2	0	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	1
合計	8	3	2	2	1	3	5	4	4	1	1	3	3

Table 2 休日の主な活動

(単位：人)

テレビ	スポーツ	学習(勉強)	DVD	買い物	外食	福祉団体の主催	読書	公園の遊具	散歩	自転車	料理	遊園地	稽古事	C/D	掃除	活動	自主サークル	その他	総計
7	4	4	3	3	3	3	2	2	2	1	1	1	0	0	0	0	0	3	39

(複数回答あり)

4人は「どちらともいえない」といった回答であった。「どちらともいえない」の回答については、現状に不満はないが、十分に満足しているわけではないことが推測される。「困っている」という回答者に、その理由を尋ねたところ、全員が「運動不足になる」と回答し、身体を動かす機会の少なさを指摘していた。そのうち2名は休日にスポーツ等、何らかの身体を動かす活動を行っていなかった。現在の休日の過ごし方の中で、何らかのスポーツを行っている対象児の保護者の回答は「満足している」が1人、「どちらともいえない」が2人であった。このことも併せると、保護者は何らかの身体を動かす活動を余暇の中で行うことの必要性を感じていることが考えられる。また、休日の活動の現状から、スポーツや福祉団体の活動が参加可能な場所にありながらも、「楽しめる場所がない」「家での遊びが単調になりがち」といった理由があげられている。このことから、現在参加可能な社会資源の場は、対象児または保護者にとっては何らかの理由で参加が難しい状況であることが予測される。障害のある子どもにとって可能な限り参加しやすい社会資源を作ることが必要である。

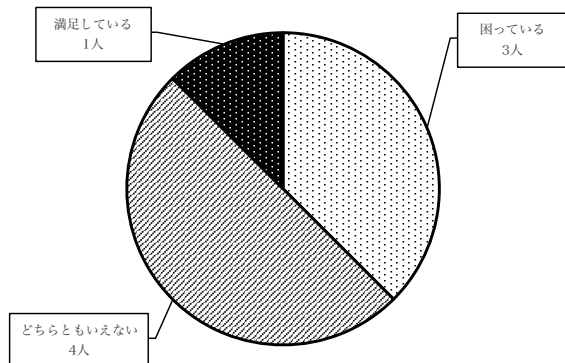


Fig. 1 休日の過ごし方について

Table 3 「困っている」理由

(単位：人)

「困っている」理由	回答者数
運動不足になる	3
楽しめる場所がない	2
家での遊びが単調になりがち	1
生活リズムがくずれてしまう	1
食事の用意など家事の負担が増える	1

(複数回答あり)

### 3. 希望する活動内容

休日の過ごし方として、保護者が希望している活動について、場所やグループ、人数に関する回答を Table 4 に、活動の内容についての回答を Table 5 に示す。希望する場所は、全体として大きな差は見られない。若干ではあるが「自宅」が一番多く、続いて「児童館・公民館」「福祉関係の施設」であった。活動するグループとしては「学校の友だち」「家族」が最も多く、続いて「近所の友だち」「ガイドヘルプやボランティア」であった。人数としては、2~4 人の小集団が一番多かった。これらの結果から、休日は、自宅あるいは近隣の児童館・公民館等で、学校で仲のよい友達数名、または家族と楽しく過ごしてほしい、という保護者の希望があるのではないかと推測する。そして活動内容については、いずれの内容も同じように希望している。つまり、いずれもが子どもにとっては必要な活動であるともいえる。つまり、余暇支援においては、これらをバランスよく取り入れることが求められているのである。

活動内容に記された具体的な内容をみると、ピアノ、卓球、サッカー、バドミントン、バレーボール、マラソン、トランプ、ボードゲームなど、文化的な活動やスポーツの機会への参加の要求の多いことがわかる。しかしながら、それらの活動に十分に参加できていないこともうかがえる。「運動・集団行動が苦手でもサポートしていただけるようなスポーツ」などの「趣味的な活動」、「ゲーム機器でないルールのある昔ながらのゲームの理解」など「室内での遊び」、「マナーの習得」などの「遠くへの外出」といった、軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもの抱える困難さに対する支援の内容も記述されていた。このことから、障害やそれに伴う困難さを配慮することが余暇支援においては必要とされていると考える。

### 4. 保護者のニーズ

アンケートの最後に、「休日の過ごし方として感じていること、気になること、希望、要望などをお書きください」として、自由記述にて回答を得た。その結果を Table 6 に示す。一般的な小学生や中学生にとっては、地域での習いごとやスポーツ教室、学校の部活動などが放課後や休日の生活において大きな位置を占めている。しかしながら、軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもの中には、その活動に参加することが難しい状況にある子どももあり、何らかの文化的な活動、もしくはスポーツへの参加が希求

Table 4 希望する活動の場所、グループおよび人数

(単位：人)

場所							グループ					人数				
自宅	福祉関係の施設	児童館・公民館	学区の小・中学校	近隣の公園	特別支援学校	その他	学校の友だち	家族	近所の友だち	ボランティア	ガイドヘルプや	その他	小集団（2～4人）	5～10人程度	11人以上	個別（1人）
3	2	2	1	1	0	2	7	5	2	2	0	6	2	1	0	

(複数回答あり)

Table 5 希望する活動の内容

活動内容	人数 (人)	具体的な内容
趣味的な活動	7	運動・集団行動が苦手でもサポートしていただけるようなスポーツ 運動系, ピアノ, 卓球
屋外での遊び	6	公園, 自転車, ボール遊び, 縄遊び, サッカー バレーボール, バドミントン, マラソン
学習的な活動	6	絵画教室やレゴブロックなどで創造制作 学習塾, 自主勉強, 習字
家事・作業的なこと	6	料理, 手伝い, 掃除, 洗濯物干し, 部屋の片づけ
ちょっとした外出	6	買い物, 外食, 親戚の家に行く
室内での遊び	5	トランプ, ボードゲーム ゲーム機器でないルールのある昔ながらのゲームの理解 おりがみ等, 画面を見なくても良いこと, まんが, テレビ, 3DS
遠くへの外出	5	旅行, 親戚の家に行く, 電車やバスの乗り方を知る, マナーの習得, 乗りなれる

(複数回答あり)

されているのである。しかし、そのような文化的活動やスポーツへの参加や、それらの活動場所を希望していても、それが近くにならないために参加することが難しかったり、参加したい活動がなかったり、参加させたいが活動の内容が子どもの状況と合わなかったりというように、障害のある子どもが活用できる社会資源の少なさやアクセスの困難さがある。また、学校以外でも友だちと遊ぶ機会があり、その時間を楽しむことができるのは、軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもの特徴であると考えられる。しかし、休日の時間を一緒に過ごす友だちを得ることは容易ではなく、家で過ごす時間が多くなることがうかがえる。その状況を改善するための対策としては、外出して人と関わるような文化的な活動やスポーツなどの機会を設けることが必要であり、それが余暇支援にも求められていることの一つであると考えられる。

Table 6 休日の過ごし方として感じていること、気になること、希望、要望など（自由記述）

---

自由記述回答の内容

---

自宅や児童デイサービスで過ごすことが多く、運動不足になりがちです。中学の運動部には参加できないので、運動を楽しめる場所があるとよいと思います。

公園などで自由に遊ばせることも必要だと思うがサークルなどの集団活動も刺激になって良いと思う。ルールのあるスポーツもやらせてみたいが、毎週となると疲れてしまうのではないかと、とも思う。

雨の日に遊べる場所が近くにないのが困ります。

用事がないと家にいることが多いので、なるべく外出して人とかかわるようにしていきたい。

参加形・体験型のイベントに参加したいと思っているが、開催場所が遠かったりして行きづらい。

学校の友だち、近所の友だちと遊ぶと楽しい。

---

#### IV. まとめ

軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもの休日の余暇支援の在り方として、以下のようなことが指摘できよう。

##### 1. 休日の過ごし方についての課題

軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもの多くは、自分の意思で自由に行動することができる。しかし、それだからといって、充実した休日を過ごすうえで困難が少ないということにはつながらないのである。保護者の多くは、休日を学校の友だちと自宅もしくは近隣で遊ぶことを望んでいる。近年、地域には子ども向けのスポーツ教室や習いごとが多くあり、中学生になると学校の部活動に所属することも可能である。そのいずれかに所属すれば、休日に仲間と過ごす時間ができるとも考えられる。しかし、全員がそのような活動に参加できるわけではなく、参加できない子どもも多くいるのである。このような状況への対応として、障害がある子どもと障害のない子どもと一緒に余暇活動を楽しむことができる場が、地域の中にあることが必要とされているのである。つまり、障害者支援制度が進んできている昨今ではあるが、軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもが、障害のない子どもと一緒に休日の余暇活動を過ごせるような場の少ないことが現状の課題として考えられる。

##### 2. 希求される社会資源の整備

障害のある子どもの放課後保障の取り組みでは、その課題の中心として、毎日通えること、そして遊びを中心とする生活の場としての放課後の活動がおかれている（障害のある子どもの放課後保障全国連絡協議会、2010）。これはすべての障害のある子どもにとって必要なことである。それと同時に、軽度の知的

障害あるいは発達障害のある子どもが充実した休日の余暇活動を過ごすためには、個々の子どもが必要とする文化的活動やスポーツの社会資源が、本人がアクセスしやすい場所、つまり地域の中あるいは近隣に整備され、いつでも活用できるような環境にあることが望ましいと考える。今回の調査においても保護者は高度な技術を要する余暇活動を望んでいるわけではない。本人が友だちと楽しく遊べたり、運動不足を解消できたりといった余暇活動が、いつでも行える場が求められるのである。

### 3. 子どもの特徴に合わせた配慮や条件整備の必要性

2016（平成 28）年に施行された障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）により、改善が図られつつある。しかし、軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもの特徴は、障害としてはわかりにくく、配慮の対象として見逃され、適切な対応がされない状況が続くことによって、一般の文化的活動やスポーツの機会、学校の部活動等に参加が難しくなってしまうことも多くある。子どもの障害について周囲の理解推進を図り、可能な限りの障害のある子どもへの配慮や条件整備を進めていくことが、軽度の知的障害あるいは発達障害のある子どもの余暇活動の充実につながると考えられる。

### 文 献

- 1) 江原真二（1988）障害児の学童保育所。藤本文朗・津止正敏（編），放課後の障害児－障害者の社会教育－。青木書店，59-83.
- 2) 藤本文朗（1988）障害者の発達保障と社会教育－新たな一ページを開くもの－。藤本文朗・津止正敏（編），放課後の障害児－障害者の社会教育－。青木書店，186-208.
- 3) 藤本文朗・三島敏男・津止正敏（1992）学校五日制と障害児の発達－子ども・学校・地域づくり。かがわ出版。
- 4) 細谷一博・大庭重治（2009）知的障害児・者を対象とした余暇活動支援事業におけるボランティアの役割。上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要，15，11-14.
- 5) 丸山啓史（2009a）障害のある子どもの放課後・休日支援の現状と課題－保護者対象全国調査より。障害者問題研究，36（4），312-319.
- 6) 丸山啓史（2009b）豊かな放課後・休日の保障。富永光昭・平賀健太郎（編），特別支援教育の現状・課題・未来。ミネルヴァ書房，125-132.
- 7) 丸山啓史（2011）知的障害の軽い子どもの放課後・休日の実態と課題。京都教育大学紀要，119，99-112.
- 8) 中央教育審議会（2004）特別支援教育を推進するための制度の在り方について（中間報告）。文部科学省初等中等教育局特別支援教育課，2004年12月1日，[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05020701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05020701.htm)（2018年8月10日閲覧）。
- 9) 森山千賀子・土井晶子（2009）日本の高齢者施設における余暇活動の現状と課題－QOLの向上に効果的な余暇活動とは－。白梅学園大学・短期大学紀要，45，49-67.
- 10) 武藤博文・高畑庄蔵・平野道子・安達勇作（1997）知的障害者の家庭生活に関する基礎研究。富山大学教育学部紀要 A（文科系），49，43-50.
- 11) 中村尚子・池本喜代正（2005）都道府県レベルの障害児地域生活支援事業の取り組みについて。宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，28，285-294.



- 12) 社会福祉法人若狭つくし会 (2012) 障害者の社会参加活動の支援に関する調査. 平成 23 年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業報告.
- 13) 障害のある子どもの放課後保障全国連絡会 (2010) 障害のある子どもの放課後活動制度化に向けてー全国アンケート調査からー. 障害のある子どもの放課後保障全国連絡会.
- 14) 津止正敏 (1988) 障害児とおもちゃライブラリー. 藤本文朗・津止正敏 (編), 放課後の障害児ー障害者の社会教育ー. 青木書店. 36-58.
- 15) 全国学童保育連絡協議会 (2003) 学童保育の実態と課題ー2003 年版実態調査のまとめー. 全国学童保育連絡協議会.
- 16) 全国学童保育連絡協議会 (2013) 学童保育の実態と課題ー2012 年版実態調査のまとめー. 全国学童保育連絡協議会.